

資本主義的生産様式と人間性疎外

—ブレイヴァマンの所論を中心として—

村 田 和 彦

一 序

本稿は、資本主義経営たる企業における労働者の「人間性疎外」(alienation)の内容とその規定要因とを具体的かつ歴史的に理解することを課題とするものである。

ところで労働者の人間性疎外の規定要因に関しては、これを、体制無関連的な機械化原理もしくは生産技術の要請にもとめる見解と、「資本主義的生産様式」(capitalist mode of production)もしくは生産技術の資本主義的利用にもとめる見解とが存在する。このうち前者に属するものの一つに、ブラウナー (Robert Blauner) の所論⁽¹⁾がある。これに対して後者に属するものの一つに、ブ

レイヴァマン (Harry Braverman, 1902—1976) の所論⁽²⁾がある。すなわち、ブレイヴァマンは、資本主義社会における職業移動もしくは労働者階級の構成上の変化とのかわりにおいて、資本主義的生産様式が「労働の質」(quality of work)に与えている影響を具体的かつ歴史的に解明することを試みている。このうちブラウナーの所論については、かつてわれわれはその検討を試みたことがある⁽³⁾。そこで本稿においては、ブレイヴァマンの所論を検討することを介して、課題の解明に努めることとする。

(1) Cf. Blauner, *Alienation and Freedom*, Chicago and London, Third Impression, 1967.

(2) Cf. Braverman, *Labor and Monopoly Capital*, New York and London, 1974.

(3) 村田和彦(稿)「産業類型と人間性疎外——ブラウナーの所論を中心として——」一橋論叢、第八二巻第二号、昭和五四年八月。

二・資本主義的生産様式と分業

ブレイヴァマンは、資本主義的生産様式の進展が「労働の質」に及ぼしている作用を、(1)「分業」、(2)「機械化」⁽¹⁾、および(3)「製品の低質化」(a degradation of the product)とのかかわりにおいて究明している。そこで本節においては、われわれは、まず、資本主義的生産様式が分業の面においてみせる進展の特質に関するブレイヴァマンの見解を明らかにしていくこととする。

なおそれに先立ってそのために必要とされるかぎりにおいて、ブレイヴァマンによる「資本主義的生産様式」の概念規定を明らかにしておくこととする。この場合にそもそも「生産様式」(mode of production)という言葉で表現されているのは、「労働過程を組織し、遂行する仕方」(the manner in which labor processes are

organized and carried out. p. 21)⁽²⁾である。ここに労働過程とは、「自然に働きかけてその形態を変更することによって自然を人間の必要により即応したものにすする活動」(p. 45)として把握されうる「労働」が展開される過程である。すなわち労働過程とは、人間が労働手段を用いて労働対象を変形することによって「使用価値を創造するための過程」(process for creating useful values)である。こうした労働過程が組織され遂行される際に依拠される原理は、歴史的に異なっている。労働対象と労働手段とを含む生産手段の所有者によって、彼に属する資本を増殖させることを目的として、労働過程が組織され遂行される場合に登場するのが、「資本主義的生産様式」である。したがって資本主義的生産様式の特徴は、一般的には、使用価値をつくり出す労働過程が同時に「資本の蓄積過程」(process of accumulation of capital; process for the expansion of capital)でもあるところにもとめられる。

ところでこうした資本主義的生産様式が機能するためには、ブレイヴァマンによれば、(1)「交換関係」(exchange relations)、『(2)「商品」(commodities)』および

(3) 「貨幣」(money)が必要とされるのであるが、その本質的特性をなすものは、「労働力の売買」(the purchase and sale of labor power)である。資本主義的生産様式においては、労働者は、生産手段から分離されており、そのために労働力を生産手段の所有者に売ることによってのみ生産手段に対する接近が可能となる。これに対して生産手段の所有者たる資本家は、自己の資本の増殖をはかることを目的として労働力を買うとともに、労働力と生産手段とを結合することによって使用価値を有する商品を生産し、そしてその販売に成功する場合には資本の増殖に成功する。したがって資本主義的生産様式においては、「自分の労働力を他人に売ること余儀なくされているので、労働者はいまや『疎外』されたものとなっている。労働者はまた労働過程に対する自己の関心を放棄する。労働過程は資本家の責任となっている。」(p. 57)これを要するに、資本主義的生産様式においては、「労働力は商品になっている。その使用は、もはやそれを売る者の欲求や欲望に応じて組織されないので、むしろその購買者、すなわち主として自己の資本の価値を増大させようとしている買い手の欲求に応じて組織され

る。」(p. 82)⁽²⁾

さて、このように一般的には特徴づけられる資本主義的生産様式は、それでは「分業」の面においてどのような進展をみせているのであろうか。この場合に問題とされる「分業」は、全社会的規模で無政府的に展開される「一般的もしくは社会的分業」(general or social division of labor)ではなくて、資本家によって意識的かつ計画的に展開される「個別の分業」(detailed division of labor)もしくは「作業場内分業」(division of labor in the workshop)である⁽³⁾。この意味における分業は、ブレイヴァマンによれば、資本主義社会の特殊の産物である。それは、「生産物の製造の内に含まれている諸工程を別々の労働者によって行なわれる種々の作業に分解すること」(p. 72)である。すなわち分業は、つぎの二段階を経て展開される。第一段階において、労働過程をその構成要素へ分解することが行われる。ついで第二段階において、分解された構成要素への相異なる労働者の割当て、すなわち「部分労働者の創出」(the creation of the detail worker)が行なわれる。ブレイヴァマンにしたがえば、「労働者が労働過程を分解することはあ

りうるが、しかしながら労働者が自発的に自らを生産にわたる部分労働者に変えてしまうことはない。」(p. 78) これは資本家によってなされる。これを資本家が行なう理由としてブレイヴァマンはつぎの三つを挙げている。

その第一は、それによって「生産性における利益」(gains in productivity) が得られることである。第二は、労働過程に対する「統制面での利益」(gains in management control) が得られることである。すなわち、労働者による熟練労働を破壊することによって、労働過程を、労働者が実質的に統制する過程から、資本家自身が実質的に統制する過程へ交えることが可能となるのである。そして第三は、「労働力の低廉化」(to cheap labor power) が可能となることである。

このうち第三の理由に関して、部分労働者の創出が労働力商品の低廉化を可能ならしめる根拠を、ブレイヴァマンはつぎのように述べている。「労働過程を遂行する労働力は、一人の労働者に統合された能力としてよりも、分解された諸要素としての方がより安価に購入されうる。」(p. 81) この原理を最初に明確化した人になんて、この原理を彼は「バベッジの原理」(Babbage

Principle) と称している。

ところで、資本主義的生産様式においては、労働力は売買される商品となっている。そこでこの労働力商品の低廉化が、労働力の購買者の特殊な不変の関心事である。そして労働力を低廉化するための最も一般的な方法を示すものが、「バベッジの原理」なのである。ブレイヴァマンは、この「バベッジの原理」こそが「資本主義社会におけるあらゆる形態の仕事を支配する基本的力」であると解し、資本主義的分業の一般法則 (the general law of the capitalist division of labor) をつぎのように定式化している。「労働過程のあらゆる段階が可能なきが特殊な知識と訓練とから切り離されて、単純労働に還元される。他方、特殊な知識と訓練を保有する比較的少数の人は、可能なかぎり単純労働から切り離される。こうしてすべての労働過程は、その極限形態においては、かぎらない価値を有する時間をもつ者と、ほとんど無価値な時間をもつ者との両極分解を生みだす構造をもつにいたる。」(pp. 82—83)⁽⁹⁾

つぎにわれわれは、既述の第二の理由、すなわち、労働過程に対する統制上の利益の問題に目を向けることと

する。資本主義的生産様式においては、資本家は自己の資本の増殖をはかるために労働力を購入し使用する。この労働力は潜在力においては無限であるが、その実現に際しては、労働者の主体的状態、労働過程の技術的・社会的状態、企業の特定的状態、労働が展開される一般的な社会状態等の諸種の要因によって限定を受けている。さらに資本主義的生産様式においては、資本家が買入られた労働力の有用性を十分に実現させようという課題の克服は、資本の増殖という自己の目的の達成のために労働過程を組織し遂行させようとする者と、労働過程を現実に担っている者との間に成立する敵対的な生産関係の存在によって困難となる。そこで資本家にとっては、「労働過程に対する統制」(control over the labor process)を、労働者の手から実質的に自己の手中に移すことが、資本増殖目的達成の不可欠の条件となる。労働過程に対する統制権の労働者から資本家への移行は、ブレイヴァマンによれば、労働者にとっては、歴史上、「労働者からの生産過程の漸進的疎外」(the progressive alienation of the process of production from the worker)として現われる。そしてそれは、資本家にとっては、歴史上、「管

理の問題」(problem of management)として現われる。^(c)ところで、労働過程の統制問題とのかかわりにおいて、テイラー(Frederick Winslow Taylor, 1856—1915)の「科学的管理論」(Scientific Management)を、ブレイヴマンは、「資本主義的生産様式のあらゆるさまざまな表現にほかならぬ」⁽²⁾の理論「(a theory which is nothing less than the explicit verbalization of the capitalist mode of production, p. 86)として把握してゐる。彼の理解するところにしたがうならば、テイラーが探求した問題は、「疎外された労働、すなわち売買される労働力をどのようにもっともよく統制するか」(p. 90)という問題であった。テイラー以前の管理においては、資本家は、確かに形の上では労働過程に対する統制権の保持者であった。ところがそこにおいては、労働者が仕事を遂行する仕方に、資本家が直接干渉することはなかった。すなわち、「作業がなされるべき仕方を厳密に労働者に指図すること」はなく、したがってまた、作業に対する何らかの決定権が労働者に残されていた。こうした事態に対するテイラーの認識を、ブレイヴマンはつぎのよう⁽³⁾に把握している。「一般的な命令や規律によってだけ

統制される労働者は、彼らが実際の労働過程を掌握しつづけているために、十分に統制されているとはいえない。彼らが労働過程そのものを統制しているかぎり、彼らは彼らの労働力に内在する潜在力を十分に実現しようとする努力のさまたげになるであろう。この状態を変えるためには、労働過程に対する統制が、たんに形式的な意味においてだけでなく、行動様式までも含めて、労働過程の各段階を統制し指揮することによって、管理者側の手に移されねばならない。」(p. 100)

こうした事実認識のもとに、管理者による労働過程の統制原理としてテイラーが提示したものが、「科学的管理」である。それは、ブレイヴァマンの理解するところにしたがえば、つぎの三つの原理からなるものである。第一原理は、「労働者の熟練からの労働過程の分離の原理」(the principle of the dissociation of the labor process from the skills of the workers, p. 113)である。これはまた、「労働過程に関する知識を収集し、それを発展させること」(the gathering and development of knowledge of labor process, p. 119)ともなわれている。第二原理は、「執行からの構想の分離の原理」(the principle of

the separation of conception from execution, p. 114)である。これはまた、「労働過程に関する知識を管理者の排他的領分に集中すること」(the concentration of the knowledge (of labor process——Murata) as exclusive province of management, p. 119)ともなわれている。そして第三原理は、「知識に対する独占を、労働過程の各段階とその執行様式を統制するために使用すること」(the use of the monopoly over the knowledge to control each step of the labor process and its mode of execution, p. 119)である。以下、ブレイヴァマンの説くところを順を追って明らかにしていくこととする。

第一原理は、従来労働者がもっていた伝統的知識をすべて収集し、この知識を分類し、集計し、規則・法則・公式にまとめることである。これによって管理者側は、労働者自身が彼らの仕事をこなうなかで習い覚え、つくり出し、そして自分の裁量だけで用いている迅速な方法と便法とを見出し、それを強要することができる。この結果、労働過程は、労働者の技能、伝統、および知識から独立したものにされる。以後労働過程は、労働者の能力にまったく依存しないで、全面的に管理者の実践に

依存すべきものとなる。

第二原理は、「科学的管理」の中心的原理である。この原理は、ただたんに肉体労働に関してのみ適用されるものではない。頭脳労働ないし精神労働も、この原理にしたがって厳然と細分化されねばならない。「構想と執行の分離の原理」に関して、ブレイヴァマンはつぎのよう述べている。「人間を労働能力の点で動物よりも優ったものにして、本質的特徴は、執行がなされようとしていることの構想と結びついているところにある。しかし人間労働が個人的現象ではなくて社会的現象になるにつれて、——本能という動因が行為から不可分離である動物の場合とは異なり——構想を執行から引き離すことが可能となる。労働過程のこの非人間化は、——そこでは、労働者は、ほとんど動物的形態の労働水準にまでおとしめられるが、他方このようなことは、生産者共同体の自主的に組織され、自由意志にもとづく社会的労働 (the self-organized and self-motivated social labor of a community of producers) の場合には、無意味で考えることもできない——購買された労働を管理するために決定的に重要となる。なぜならば、もし労働者による

執行が彼ら自身の構想によって導かれるならば、……資本が望む方法上の能率も、労働速度も労働者に押しつけることができなくなるからである。それゆえ資本家は最初から人間の労働力のこの側面を利用して、労働過程の統一を破壊しようとするのである。」(pp. 113—114) この結果、労働者は、自己の生産手段に対する統制 (control over the instruments of production) を失うだけではない。いまや彼らは、自分自身の労働とその遂行様式に対する統制 (control over the own labor and the manner of its performance) をも手渡さねばならなくなる。

なおこの第二原理は、労働力の低廉化の要請にもこたえるものである。この点に関してブレイヴァマンは、つぎのように述べている。「テイラーは同時代のだれよりもバベッジの原理をよく理解し、ものごとの計算にあたっては、常にそれを優先していた。彼の考えでは、作業研究の目的は、けっして労働者の能力を向上させることでも、より多くの科学的知識を労働者に集中させることでも、技術の向上にともなう労働者の向上を保証することでもなかった。そうではなくて、目的は、労働者の訓練

を短縮し、彼の産出高を増大させることによって、労働者を低廉化することに置かれていた。」(pp. 117—118)これを要するにブレイヴァマンによれば、「管理者に統制を保証するためにも、労働者を低廉化するためにも、構想と執行とは別々の労働領域とされねばならず、また、この目的のために、作業過程の研究は、管理者のものとされねばならず、労働者のものとされてはならない。」(p. 118)

第三原理が要請しているのは、ブレイヴァマンによればつぎのことである。「(管理者による作業過程に関する——村田)研究の結果は、単純化された指令に基づく単純化された課業(Operations)という形でだけ労働者に伝達され、それ以後は何も考えず、指令の基礎をなしている技術的理由やデータについて理解することなく、指令にしたがうことが労働者の義務とされる。」(p. 118)この第三原理に関して、ブレイヴァマンはつぎの点を強調している。「『普通の管理法』(the ordinary types of management)の基本的考え方は、テイラーによれば、『各労働者は管理者側でだれ一人かなうものがないほど自分の身の仕事に熟練しているのです、それゆえ一番よい仕事の

仕方の細目は、労働者にまかせておくべきだ』というところにある。だがこれとは対照的に『現代の科学的管理において最も顕著な要素を一つあげれば、おそらくそれは課業という観念である。……この課業は、なされるべきことだけでなく、それを行なう方法とそれに要する正確な時間とを詳細に規定するものである。……科学的管理は、これらの課業を作成し実行させることのうちに主として存する。』この原理において……根本的な要素は、労働過程のすべての要素をあらかじめ系統的に計画し、計測することにある。こうして労働過程は、もはや過程としては労働者の頭の中に存在しなくなり、特殊な管理職員の頭の中にだけ過程として存在するにすぎないものとなる。」(pp. 118—119)

以上が、資本主義的生産様式が分業の局面においてみせる進展の特徴としてブレイヴァマンによって指摘されている事項の概要である。

(1) 「製品の低質化」に関しては、ブレイヴァマンの著書においては、われわれの理解するところによれば、結局「分業」ならびに「機械化」をおしすすめやすい製品に、製品の質自体を変更する企業努力が問題とされている。

(この点については、ブレイヴアマンの著書の二〇八頁から二二二頁を参照のこと。)そこで本稿においては、われわれは、主として、「分業」と「機械化」の局面を取り上げることにする。

(2) 以下、本文中の括弧の中のアラビア数字は、ブレイヴアマンの著書からの引用箇所の頁数を示すものである。

(3) 以上の論述は、主としてブレイヴアマンの著書の Chapter 1. Labor and Labor Power に拠っている。

(4) 社会的分業と個別の分業に関して、ブレイヴアマンはつぎのように述べている。「社会的分業が社会を細分化するのに対して、個別の分業は人間を細分化する。また社会の細分化が個人と人間全体を向上させうるのに対して、個人の細分化は、人間の能力と欲求を顧慮しないで行なわれるならば、人間と人間性とに対する犯罪となる。」(p. 75)

(5) 以上の論述は、主としてブレイヴアマンの著書の Chapter 3. The Division of Labor に拠っている。

(6) Cf. Braverman, op. cit., pp. 56—58.

(7) 以下のテイラーの科学的管理に関する論述は、ブレイヴアマンの著書の Chapter 4. Scientific Management に拠っている。

三 資本主義的生産様式と機械化

本節においては、労働手段の機械化の面における資本

主義的生産様式の進展の特質に関するブレイヴアマンの見解を取り上げることとする。

ブレイヴアマンによれば、そもそも資本主義的生産様式のもので機械化を推進しようとする努力には、つぎの二つのものがある。その第一は、「生産性増大衝動」(The drive for greater productivity, p. 170)である。第二は、「労働者が主導する過程としての労働過程を解体し、それを管理者が主導する過程に再編成しようとする管理者の努力」(p. 170)である。このうち、ブレイヴアマンは後者の努力に注目する。すなわち、資本主義的生産様式のもとにおける機械化の推進原理として、「過程の主体的要素としての労働を駆逐し、それをいまや管理者が主導する生産過程における客体的要素として従属化すること」(p. 172)を、彼は、とくに重要視する⁽¹⁾。

ところで機械に対する接近方法には、工学的接近方法 (engineering approach) と社会的接近方法 (social approach) とがある。前者は、機械をそれ自体との関連で、すなわち「技術上の事実」(a technical fact) として規定するものである。これに対して後者は、機械を人間労働との関連で、すなわち「社会的人工物」(a social

artifact) として規定するものである。このうち社会的接近方法から機械の発展を考察するならば、ブレイヴァマンによれば、「機械の運動が制御される仕方」(the manner in which the operations of machinery are controlled) を基準として、つぎのような段階が区別される。第一段階は、「道具および(あるいは)工作物が機械自体の構造によって固定的な運動軌道(a fixed motion path)を与えられている」段階である。第二段階は、「道具および(あるいは)工作物が固定的サイクルもしくは単サイクル(a fixed or single cycle)の運動形態をとる段階である。第三段階は、「既定のパターンにしたがって一連の操作の進行を指示する機構を内蔵する多機能機械(the multiple function machines in which the mechanism indexes its way, according to a preset pattern, through a sequence operations, p. 189)の段階である。

「機械の発展史のこの段階までのすべての機械の特徴は、機械の作業パターンが機構内部に固定化されており、外部の制御にも、機械自身の作動中の結果にも連動していないことである。その運動は、自動的というよりも、あらかじめ決定されたものである。」(p. 189) 第四段階は、

作動している機構自体の外部から伝えられる情報、もしくは機械自体の作業の進行から得られる情報にしたがって機械が制御される段階である。外部の情報源から、あるいはそれ自身の作業から情報を引き出すというこの性能は、ブレイヴァマンによれば、機械発展の趨勢にある種の逆転をもたらす。すなわちこれ以前は、機械の発展は、「汎用機から専用機へ」(from the universal to the special purpose machine) 向かうものであったのに対して、第四段階になると再び「機械の汎用性」(the universality of the machine) の復活をみることとなる。

さてこうした個々の機械における制御の改良と同様に重要なのは、複数の機械相互の組み合せである。これに関して、つぎのような段階を区別することが可能である。すなわち、(1)作業系列にしたがった個々の機械の配置、(2)機械から機械への被加工物の移動のためのシュートやコンベアー等の設置、(3)トランスファーマシンの使用、(4)被加工物による機械の起動、および(5)連動機械体系(a system of connected machinery)の登場がそれである。⁽²⁾

ところで機械の発展段階は、一般に、「道具の運動に

対する人間の統制の増大」、ないし「労働過程に対する人間の統制の増大の過程」として理解される。しかしながらこうした理解は、いまだ一つの抽象にすぎない。ブレイヴァマンによれば、「この抽象は、機械発展の背景をなしている社会的状態 (social setting) の中で具体的形態を獲得しなければならない。」(p. 193) ここで社会的状態としてブレイヴァマンによって把握されているのは、「大部分の人間が、『人間性』(humanity) という一般的な目的それ自体のためではなくて、むしろ労働過程を統制している者の目的のために労働過程に従わされている」(p. 193) という状態である。こうした状態のもとでは、「機械は、『人間性』に役立つものとしてではなくて、資本蓄積によって機械の所有権を獲得する者の手段として、この世に現われてくる。機械によって労働過程を統制するという人間の能力は、直接的生産者ではなく、資本の所有者および代理者が生産を統制するための主要な手段として資本主義の出発点からこれを捕捉している。」(p. 193) したがってブレイヴァマンの見解によれば、「機械は、労働の生産性を増大させるという技術面での機能——これは社会体制の如何にかかわらず、

機械の特徴をなすであろう——に加えて、資本主義体制のもとでは、みずからの労働に対する統制を労働者大衆から奪い取るという機能をも有している。」(p. 193)

ところで機械の発展は、既述のごとく、抽象的には「人間の能力の拡張」(an expansion of human capacities) を示している。すなわち生産用具の適用範囲をますます拡大し、その精度をますます高めていく能力によって、「環境に対する人間の統制の増大」(an increase of human control over environment) を示している。この場合に、「機械の統制がもはやそれを直接的に操作する者にたくされる必要がなくなるといふことは、機械の本性に内在することであり、技術発展の当然の帰結 (a corollary of technical development) である。」(p. 194) ブレイヴァマンによれば、資本主義的生産様式はこの可能性をとらえ、それを最大限に利用する。「たんなる技術面での可能性 (technical possibility) にすぎなかったものが、産業革命以後、自然的な災禍の力をもって荒廃をもたらすような不可避性 (inevitability) に転化してしまう。」(p. 194) すなわち資本主義的生産様式においては、「機械の著しい発展は、労働人口の大部分にとって、自由

ではなく隷属の源泉、支配ではなく無力の源泉、労働の地平の拡大ではなく、労働者を奴隷的苦役の袋小路——そこでは機械が科学の具体化として現われ、労働者は無い無に近いものとして現われる——に閉じこめてしまふ源泉となる。」(p. 194—195)

しかしながらこうした結果は、ブレイヴァマンによれば、「機械の技術上の必然」(a technical necessity of machinery) ではけっしてない。それは、「機械の資本主義的利用」の必然である。すなわち、「機械は管理者に対して、管理者がかつては組織や規律という手段で行なおうとしていたことを、まったく機械という手段だけを用いて行なう機会を提供する。多くの機械は、集中化された決定にしたがって調整され制御されうるといふ事実、またこれらの制御は、こうして生産現場から事務部門に移されて管理者が掌握しようといふ事実——これらの技術上の可能性 (technical possibilities) は、機械が労働生産性を倍増するといふ事実と同様に、管理者にとって大いなる関心事である。」(p. 195)

以上、要するに、資本主義的生産様式のもとでは「機械化」は、労働過程に対する統制を労働者から管理者へ

移すために推進されるとするのが、ブレイヴァマンの見解である。他方、機械の利用によって労働生産性を高めようとする管理者の努力に関しては、ブレイヴァマンは、つぎの点を強調している。「機械の利用形態——機械を中心に労働が組織され配置される仕方——は、資本主義的生産様式の性向によって支配されているが、機械化衝動それ自体は、労働の生産性を高めようとする努力によって支配されている。しかし高まっていく労働生産性は、資本主義によって、人間の欲求の充足 (the satisfaction of human needs) という観点から追求されるものでも利用されるものでもない。むしろそれは、資本蓄積過程の欲求 (the needs of the capital accumulation process) に迫られて、熱狂的な衝動に化し、普遍的な社会的狂気のレベルにまで近づくのである。どこまでいっても生産性がこれで十分だとみなされることはけっしてない。」(p. 206)

「資本主義的企業は、資本の増大のための組織であることを目的としているので、生産性を向上させようとする衝動は、どの企業にも本来的に備わっているものである。遅れをとっている企業は、なおさらのこと、国内

的・国際的競争の脅威にさらされて、生産性向上衝動を強化せざるをえない立場に追い込まれる。このような状況のもとでは、技術の発展は猪突猛進といったかたちをとり、その際社会的な諸影響はほとんど無視され、優先順位は、もっぱら収益性 (profitability) を基準にして決められ、そして社会的観点から考慮された、科学の成果の公正な普及、合理的摂取、および選択的充用は、救いようのない理想家の夢にとどまる。生産性が向上するたびに、それは、真に生産的な労働者の数を減少させ、剰余の分配をめぐる企業間競争に利用するために使用しうる労働者の数を増加させ、浪費的職業に労働をますます多く用いさせるか、あるいはまったくの失業状態を生み出し、そして社会全体をますます狭隘化する有用労働の基礎の上に据えられた逆ピラミッドのような形にしてしまふ。」(pp. 206—207)

以上が、資本主義的生産様式における機械化の進展の特徴に関するブレイヴァマンの見解の骨子である。これを要するに彼の見解の特質は、機械化、さらには技術進歩そのものが、資本主義的生産様式においては、資本主義的分業の原理の貫徹に貢献する形で展開をみるとする

ところにもとめられる。⁽³⁾

- (1) Cf. Braverman, op. cit., pp. 170—172.
- (2) Cf. Braverman, op. cit., pp. 188—192.
- (3) 以上は、主としてブレイヴァマンの著書の Chapter 9. Machinery に拠る。

四 資本主義的生産様式と「労働の衰退」

以上においてわれわれは、資本主義的生産様式の特質に関するブレイヴァマンの見解を、分業の原理と機械化の原理に焦点をあてて明らかにした。そこで本節においては、資本主義的生産様式の進展が「労働の質」に及ぼす影響としてブレイヴァマンによって把握されているものを明らかにしていくこととする。

結論を先に述べるならば、こうした影響を、彼は、「労働の衰退」(Degradation of Work) として把握している。そこで以下においては、「労働の衰退」として把握されているものの内容を明らかにしていくこととする。

その第一は、労働過程に対する関心をそもそも労働者ももたないという事態である。こうした事態は、ブレイヴァマンによれば、そもそも資本主義的生産様式が労働

働力商品の売買をその本質的特性としてもっていること、すなわち自己の生活を営むためには労働者は自己の労働力を他人に売らざるをえず、しかも労働過程は労働力の買い手の目的の達成のために組織され遂行されるものであることに起因している。「自分の労働力を他人に売ること余儀なくされた労働者は、……労働過程に対する関心を放棄する。」(p. 57)

第二に「労働の衰退」として把握されているのは、資本主義的生産様式の進展とともに、労働者が労働過程に対する統制を実質的に喪失していく事態である。こうした事態は、ブレイヴァマンによれば、そもそも資本主義的生産様式がつぎのような三つの内容を有する分業の原理にしたがって展開されることに起因している。すなわち、(1)労働生産性の向上、(2)管理者への労働過程に対する統制の集中、および(3)労働力の低廉化がそれである。こうした資本主義的分業の原理にもとづいて、「構想と執行が互いに切り離され、さらにますます細分化され、その結果、構想が管理者およびそれと密接に関連している者の内部のますます限られた集団に、可能なかぎり集中化されていく」(p. 125)にしたがって、労働過程を

労働者が自己の構想にもとづいて統制することは不可能となる。しかもこうした事態は、資本主義的生産様式のもとにおける機械の利用が、そもそも資本主義的分業の志向するものを実現することをその目的とするものと解されるがゆえに、ますますその度合いを強めるとブレイヴァマンは解している。

第三に「労働の衰退」として把握されているのは、労働者が労働過程を理解することがますます困難になっていく事態である。「ほとんどの労働過程が科学的性格をますます強めていき、複雑性を増していくのに、労働者の方は、この成長を共有することが許されなかったために、労働者にとっては、自分達がそこで働いている労働過程を理解することがますます困難になってしまったのである。」(p. 119—120)

第四に「労働の衰退」として把握されているのは、「科学」⁽¹⁾との日常的結びつきを労働が喪失していく事態である。こうした事態は、ブレイヴァマンによれば、資本主義的生産様式においては、労働過程に関する構想は、これをもっぱら管理者が独占的に担当する必要があるから、「管理者が科学に対する独占権を主張するようになる」

(p. 131) ことに起因している。この点に関して、ブレイヴァマンはつぎのように述べている。「熟練労働が破壊され、あるいはその伝統的内容がますます空虚なものにされていくにつれて、すでにか細くなり、脆弱化しているが、いまなお労働人口と科学とを結びつけていた紐帯は、多かれ少かれ徹底的に破壊されてしまう。この結びつきは、過去においては、主に労働者階級中の熟練労働者 (craftman) もしくは職人 (artisan) の部分を通じてつくりあげられており、そして資本主義の初期にはきわめて緊密であった。管理者が科学に対するその独占権を主張するまえは、熟練労働者層が、当時存在していた形態での科学的生産技術の主要な担い手であった。」(p. 131)

第五に「労働の衰退」として把握されているのは、労働者の技術能力 (technical capacity) の衰退である。すなわち「従来の熟練形態の労働ではなく、別のところで構想され統制される単純化された課業にもとづく労働の組織化は、労働者の技術能力を明らかに衰退させる力をもっているのである。」(p. 127)

これを要するに、ブレイヴァマンによって「労働の衰

退」として把握されているのは、われわれの理解するところによれば、つぎのとおりである。すなわち、(1) 労働過程に対する労働者の無関心、(2) 労働過程に対する労働者の統制の喪失、(3) 労働過程に対する理解の欠如、(4) 労働者と科学との結びつきの欠如、および(5) 労働者の技術能力の衰退がそれである。⁽²⁾

こうした意味での「労働の衰退」を生ぜしめるものは、ブレイヴァマンによれば、資本主義的分業と機械の資本主義的利用なのであるが、同一の事態が、「製品の低質化」によってひきおこされることをも、彼は指摘している。こうした例の一つとして、建設業における新建材(とくにプラスチック製品)の使用、スプレー・ガンによる塗装・壁ぬり、およびできるかぎり多くの部品の、工場における事前の組み立て等によって、取りこわされた建造物の耐用年数よりも短かい建造物が建設される場合を挙げている。⁽³⁾

ところでブレイヴァマンによれば、「労働の衰退」は、あくまでも資本主義的分業および機械の資本主義的利用に起因する事態であって、技術的必然性をもつ事態ではけっしてない。にもかかわらず、「労働の衰退」を技術

的必然性に由来する事態として把握することが流行している。そこで、こうした流行に対して、ブレイヴァマンはつぎのような批判的見解を表明している。「人間に対する支配力の根源を、事實は社会関係 (social relations) にあるのだが、機械にもとめることが流行となっている。この見解によれば、社会はもっぱら科学と技術を基礎にして成り立つものほかならず、機械自体が敵とされる。

人間の労働と創意の産物にすぎず、人間がみずからの意志で設計し、つくり、そして改造可能な機械が、人間の社会組織への独立した参加者としてみなされるのである。機械は生命を与えられ、労働者との間に『関係』——機械自体の本性が規定する関係——を結び、人間の生活の形態を決める力を付与され、そして時には、人類に対して何らかの意図をもつものとさえされるのである。これは社会関係の物象化 (the reification of a social relation) であり、……マルクスの用語で言えば、物神崇拜 (fetishism) 以外のなものでもない。」(p. 229) 「雇主が細心の注意と厳密さをもつて計画した通りに機械が彼のために動く、機械は人間の目には、独力でかつそれ自体の内的必然性にしたがって (for themselves and out

of their own inner necessities) 動じているように見える。これらの必然性は、『技術的必要』(technical needs)、『機械特性』(machine characteristics)、『効率要件』(The requirements of efficiency) と呼ばれるが、しかしそれらは、概して資本の要件 (exigencies of capital) であって、技術の要件 (exigencies of technique) ではない。機械にとつては、それらは、機械が有する可能性のうちで資本が最も精力的に開発しようとする側面、すなわち統制を執行から分離する技術的能力 (the technical ability to separate control from execution) を表わすものにすぎない。」(p. 230)

ところでブレイヴァマンによれば、「実際には、機械は多くの可能性を有している。だがそのうちの多くは、資本によって発展させられることなく、むしろ組織的にさまたげられている。機械の自動体系は、労働者が技術的知識の獲得によって機械を征服できる段階にまで到達し、さらに最も技術的に進んだ作業から最も常軌化した作業に至るまでの日常的な諸作業を労働者がみずから間に配分するようになるならば、比較的小集団の労働者によって生産性の高い工場を共に統制する可能性を開く

ものである。」(p. 230)

ここにはブレイヴァマンの理想とする労働過程の姿が描かれている。しかしながら現実には、「この可能性は……分業をその最悪の側面にわたって再構成し、深化させしようとする資本家の努力によって、繰り返し挫折させられている」(p. 230)とするのが、ブレイヴァマン⁽⁴⁾である。

(1) 科学の歴史を、ブレイヴァマンは、「生産にとって主要なものではなかった、一般化した社会的財産としての科学」から「生産の核心をなす、資本家の財産としての科学」への発展として把握するとともに、つぎのように述べている。「科学は、資本の付属物となる最後の——そして労働について最も重要な——社会的財産である。アマチュア・『哲学者』・思想家・知識の探求者の領分から、現在の高度に組織化され、潤沢な資金を供給されている状態への科学の移り行きの歴史は、主として、資本主義的企業とその補助機関への科学の包摂の歴史である。」(p. 156)

(2) 組織的手段と技術的手段による労働生産性の恒常的上昇は、必然的な結果として、「労働需要の減少」をもたず。しかしながら、管理と機械技術の現代的方法の適用は、ブレイヴァマンによれば、第一に、生産規模が急激に増大するときのみ、実際的なものとなること、第二に、

機械化自体が労働排除の過程に対して制限を課していることが注意されねばならない。このうち第二の点について詳言するならば、労働者を排除する機械を用いるよりも労働者を用いる方が安上がりですむこと、したがって機械化の速度それ自体が、機械化に対する阻止要因として働くことが注意されねばならない。(Cf. Braverman, op. cit., pp. 236—237.)

(3) Cf. Braverman, op. cit., pp. 208—212.

(4) ブレイヴァマンは「ソビエト連邦の労働組織に関して、つぎのような見解を表明している。

「ソビエト連邦の労働組織は、資本主義国の労働組織とほとんど異なるところがない。」(p. 14)「ソビエトでの慣行と伝統的資本主義的慣行とが類似していることから、近代産業の組織化には、これ以外の道はないという結論が導出されやすい。」(pp. 15—16)しかしながら、「こうした事実に対しては、ブレイヴァマンによれば、「社会的諸関係の一時代の末期に特有な生産諸力は、同時に後統の時代の初期に特有な生産諸力と同一である」(p. 19)ことが想起されねばならない。さらに、「技術は、社会関係をたんに生み出すだけでなく、……社会関係によっても生み出されるものである」(p. 20)ことが銘記されねばならない。すなわち、「社会形態の変化の結果として生産様式が自動的になり、またただちに変更されることがありえないとするならば、ソビエト連邦に見られるような混合的構成体も驚くに

値しないだろう。資本主義もそれ自身の生産様式を發展させるために数世紀を要し、この生産様式は今でもなおつくり出され發展させられてゐる。」(p. 23)

五 ブレイヴァマンの所論の特質

われわれは以上において、資本主義的生産様式の進展が「労働の質」に与える影響に関するブレイヴァマンの見解を明らかにした。そこで本節においては、資本主義的生産様式における労働者の人間性疎外の形態、規定要因、および傾向に関するブレイヴァマンの所論の特質を、ブラウナーの所論との対比において明らかにすることとする。

まず人間性疎外の形態についてみるならば、ブラウナーにおいては、これは、(1)無力性、(2)無意味性、(3)孤立、および(4)自己疎隔の四つに整理されていた。これに対してブレイヴァマンにおいては、人間性疎外は「労働の衰退」として把握されており、しかもそれは、労働過程に対する労働者の(1)無関心、(2)統制の喪失、(3)無理解、(4)労働者と科学との結びつきの欠如、および(5)労働者の技術能力の衰退を内容とするものである。

つぎに人間性疎外の規定要因についてみるならば、ブラウナーにおいては、(1)技術、(2)分業、(3)社会的構造、および(4)経済状況の四要因が指摘されるとともに、このうちでとくに「技術」が最も重要な規定要因としてみなされている。すなわち、「技術」によって多かれ少かれ他の三要因は規定をうけると解されている。ここでとくに注意されるべきは、「技術」が「分業」の大枠を規定すると解されている点である。これに対して、ブレイヴァマンにおいては、人間性疎外の規定要因としては、(1)資本主義的分業、(2)機械の資本主義的利用、および(3)製品の低質化が指摘されている。このうち第三の製品の低質化は、われわれの理解するところによれば、分業と機械化の展開を容易にするような製品に製品自体の質を交える努力にほかならない。他方、機械化は、資本主義的分業の志向するところのものをより容易に達成するための手段として位置づけられている。すなわち人間性疎外の規定要因としてブレイヴァマンによって最も重要視されているものは、機械化したがってまた技術よりもむしろ「分業」である。この場合に分業のねらうところのものは、(1)労働生産性の上昇、(2)労働過程に対する統制機

能の管理者への集中、および(3)労働力の低廉化である。しかもこれらは、いずれも生産手段の所有者が有する資本の増殖に貢献するものと解されている。

最後に人間性疎外の傾向についてみるならば、ブラウナーの場合には、人間性疎外の程度は、「熟練技能型技術」の段階から「機械監視型技術」の段階と移行するにしたがって強まり、「組み立て線型技術」の段階において極度に達した後、「連続工程型技術」の段階になると逆に弱まるものと解されている。これに対してブレイヴァマンにおいては、機械の発展にもなつて制御の源泉が人から機械自体に移行するにつれて、さらに機械が機械自体にあらかじめ固定された軌道ではなくて、外部の情報やみずからの運動の結果にもとづいてみずからを制御しうるようになるにつれて、労働者に必要とされる技能は減少の一途をたどり、したがってまた人間性疎外の程度は強まるものと解されている。そしてこうした自己の見解とのかかわりにおいて、ブラウナーの見解にもふれている。すなわち、生産の総過程を再び労働者のうちに取りもどそうとする現代産業の傾向を例示するものとして、化学オペレーターの仕事を選出したブラウナー自

身が、(1)化学オペレーターが化学過程について何も知る必要がないこと、および(2)操作から保守への配置転換は一般的に行なわれるが、逆方向の配置転換は実質的にまじないことを認めていることを指摘した上で、ブレイヴァマンは、化学産業においても、「生産過程の自動化によって、生産体系は管理技師の統制のもとに置かれ、知識や訓練の必要は破壊されている」(p. 225)ことを強調している。⁽³⁾

われわれは、すでにブラウナーの所論を取り上げた際に、彼の所論においては、人間性疎外の最も重要な規定要因とみなされている「技術」と「資本主義的生産様式」の間の関連が不問に付されている点を指摘した。この点とのかかわりにおいてブレイヴァマンの所論の特質としてわれわれがただちに指摘しうるのは、ブレイヴァマンの所論においては、一方において資本主義的生産様式のもとで展開される分業と機械化とが依拠している原理が明確にされるときに、他方においてこれらの原理が資本主義的生産様式の進展にもなつて「労働の衰退」を生ぜしめる関連が明確にされている点である。

(1) ブラウナーの所論については、つぎを参照のこと。

村田和彦(稿)、産業類型と人間性疎外——ブラウナーの所論を中心として——、一橋論叢、第八二巻第二号、昭和五四年八月。

(2) Cf. Braverman, op. cit., pp. 214—224.

(3) Cf. Braverman, op. cit., pp. 224—225.

六 結

本稿におけるわれわれの課題は、企業における労働者の人間性疎外の内容とその規定要因を具体的かつ歴史的に理解することであった。そのための手がかりを、われわれはブレイヴァマンの所論にもとめた。その結果、われわれが明らかにしえたのは、ブレイヴァマンの所論においては、「資本主義的分業の原理」そのもののうちに、「労働の衰退」をもたらす究極的原因がもとめられていくことである。この場合に「資本主義的分業の原理」と

してブレイヴァマンによって把握されているのは、(1)労働生産性の上昇、(2)管理者による労働過程の統制、および(3)労働力の低廉化である。そして「労働の衰退」としてブレイヴァマンによってとくに強調されているのは、労働過程に対する労働者の統制力の喪失である。しかもこれは、彼の見解にしたがうならば、資本主義的分業の原理にもとづいて、企業がなかんずく「構想と執行の分離」に努力を傾注することに起因するのである。

企業における労働者の人間性疎外という現象に関してわれわれが具体的・歴史的理解を得ようとするならば、われわれは資本主義的生産様式と人間性疎外との間の関係を不問に付することはできない。ブレイヴァマンによって試みられた両者の関連づけは、われわれに貴重な切り所を提供するものである。

(一橋大学助教授)